

祭り 『イジチュール』

重 光 マリ子

エリアーデはその著『永遠回帰の神話』において、古代人にとっては外来の事象も人間の行為もそれ自身としては何ら自律的本来的な価値をもたず、「事象とか行為とかは、一つの様式、または他の様式に従って、それらが超越する実在とかかわりあうゆえに価値を獲得し、そのことによって真実なものになる。」¹⁾と、いい祭儀をそうした様式のひとつとして意義づけている。また、ランガー女史はその著『シンボルの哲学』で、自己に明確な定位を与えてくれる世界像への要求が生み出した「真剣な思考の最も原始的な反映」²⁾として祭式をとらえている。また、ホイジンガはその著『ホモ・ルーデンス』において「祭祀とは結局、何かを表出して示すこと、劇的に表現して表わすことである。つまり物事を形象化してイメージを創り出すことによって現実にとって代わるものを生み出す行為である。」³⁾という。祭りについての定義も、それぞれの人の思想的立場・観点によって異なるが、これらの人々の提言をとおしていえることは、祭りは、価値、超越的実在、自己の定位、世界像、宇宙像といった形而上学的問題についての思考を、イメージ、あるいは象徴を通じて表現し確立する行為であるといえようか。祭りをこのようなものとして考える時、『イジチュール』において展開されているドラマもまた、ひとつの祭りであると理解される。そこでは、マラルメという一詩人＝一祭司⁴⁾によって、イメージあるいは象徴を介して⁵⁾精神をそれ自体において永遠無限なる絶対的存在として祀り、そうして祀られた精神において自己を価値づけるという行為がなされている。それはまた、精神についての認識の転換であり、あらたな霊的宇宙像の確立である。

まず、偶然についてみれば、偶然はそれまで、「私を闇と創造された時とに

分けたあの旧敵¹⁷⁾として、すなわち精神の無限性・絶対性を否定するものとして考えられていたのだが、『イジチュール』においては、それは、精神の無限なる営みを現実可能とする精神の一契機に他ならぬものとして精神の中にとりこまれる。精神は「あなた方、数学者達¹⁸⁾とイジチュールが呼びかける人達によって考えられたような静的な、事物的なものではなく、常に営みとしてあるものと考えられる。

一方で曖昧さがやむと、他方である動き、厳しい、二重の衝撃によって切迫した動き、それはもはやあるいはまだ自身の観念に達しない、そしてその実際の摩擦音、起こるべきであったようなその音は、曖昧さを、あるいはその停止を混然と満たす¹⁹⁾

こうして「無限は偶然から発する」²⁰⁾、あるいは「偶然はありかつ無い——彼は偶然を無限に帰す」²¹⁾といわれるに至る。すなわち、偶然は精神の無限性の中に止揚されて、それ自体としては廃棄される。

また詩人がこれまでに見かつ生きてきた様々な夢については、例えば半獣神の夢、エロディアドの夢については、それらは所詮偶然の侵入によって傷つけられ消滅する虚無でしかないものと考えられていたのだが、ここでは、無限なる精神の発展的営みの中の諸段階においてあらわれかつ消えた影として、すなわち精神の必然的諸現象として把握される。影は確かにそれ自体としては有限なもので消えてゆかざるを得ぬものだが、その有限性も精神の無限性の中に止揚される有限性であり、従ってその虚無は精神の無限性において無化される。こうしてこれまでの様々の影は、精神の本質のあらわれとしての影、純粹なる影の中に統括され、かつ、純粹なる影によって超出される。

終極の影は、彼自身の自己の中に自らを映し、一方の手の模糊たる知の真珠母色の星と、他方の手の書物の紋章の刻まれた留め金の黄金の輝きとにおいて理解されたその多くのあらわれの中に、自身を認めた²²⁾

自我の高みに至った純粹なる影は、過去と未来とを、それらの外にあって、完全に十全に支配する²³⁾

誤解されてはならないのは、ここで純粹なる影を通しておこなわれている自己認識は、本質においてそれ自体として存在する永遠無限なる絶対的存在である精神の自己認識であって、マラルメという一個人の有限的精神の自己認識ではないのだということである。ただ精神の中にあってはいかなるものも現象でしかありえず、精神は現象においてしか自己をあらわすことのできないものであるが故に、純粹なる影という現象において自己をあらわし自己を認識するのである。従ってまた当然次のような欲望が生まれてくる。

私はこの音（私自身の心臓の鼓動）を好まない。私の確信の完全さは私を苦しめる。すべてはあまりにも明晰であり、明晰さは逃走への欲望を示す。すべてはあまりにもきららかであり、私は私の以前のつくられぬ影に戻りたい。そしてこの民族の心臓に住むという必然性が私に課した仮装を思惟によって解きたい¹⁴⁾

仮装、それは一般的な祭りにおいてもしばしばおこなわれる。仮装することによって人は神的なるものを自身において体現し、神的なるものの存在に与り、それについての確信を獲得すると考えるからなのである。例えばある未開人にあっては仮面をかぶって精霊になるように（ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』62ページから69ページを参照されたい。）、またアイヌ人が熊祭りにおいて熊に仮装するように、さらにはまたキリスト教における神秘劇などにも同様のことがいえないであろうか。

ところでこの純粹なる影とよばれる仮装はより具体的にはいかなるものか。

そして鏡の奥で私が再び目を見開いた時、私はその恐怖の人物が、恐怖の幻影が鏡の中に残っている感情と苦悩とを少しずつ呑みこむのを、その恐怖をシメールの崇高なおののきと壁掛けの不安定とで養うのを、そして未聞の純粹さにまで鏡を稀薄化しながら自らを形づくっていくのを見ていた。かくして終には、それは絶対的に純粹な鏡から、その冷たさにとらわれたかのように、恒久的な形であらわれ出たのだ¹⁵⁾

また1867年5月カザリスにあてた手紙では、

しかしこの闘い（あの古くからの意地悪な羽毛との闘い）はその骨ばったつばさの上でおこなわれたので、そのつばさは私が予想した以上のその中なる苦悶によって私を闇の中へと連れ去ったのだが、私は勝ち誇って、狂ったように限りなく墜ちゆき、そうして終には、ある日、私のベニス製の鏡を前にして、私は再び私を見るに至ったのだ。それほどまでに幾ヶ月も私は私を忘れていたのだった¹⁶⁾

ランガー女史は先にあげたその著『シンボルの哲学』の中で「アカイア人の山岳神、オリンポスのゼウスは、土着のペラゴイ人の神々がまだ動物の形状を保っており、またはせいぜい怪物的な雑種であった時、すでに人間の姿をとっていた。』¹⁷⁾と語り「ただひとつのより高度な表象は、人間思想の重苦しい無定形の集塊の中ではおどろくべき発酵素たりうる。』¹⁸⁾と述べているが、人類の精神史においてみられるのと同じことが、マラルメの精神史においてもみられるのである。

要するに、それは自己の劣れる主の剛毛の生えた腹ではなくて、…、優れた一民族のヴィロードの胸像である¹⁹⁾

すなわち、純粹なる影と呼ばれる仮装は、具体的には、詩人の実際の姿、人間の姿である。詩人は、鏡を前にして、鏡にくっきりと映っているわが姿を見つめながら、「私はある」と断言する。ただ繰り返すようだが、この私なるものは、すでに絶対的存在である精神となっている私なのである。ホイジンガが『ホモ・ルーデンス』において、ある宗教形式におけるそれぞれ別の秩序のなかでの「二つのものの統一」ということは、実体とその象徴的イメージのあいだの対応関係よりも、はるかに深淵であり本質的なものである。それは神秘的な統一なのである。その一方のものが他のものに〈なる〉のだ。』²⁰⁾といているがそれと同様のことがここで起こっているのである。従ってこの時、マラルメはマラルメ個人としては死ぬ。個人としては死ぬことによって、永遠無限なる絶対的存在である精神を一瞬にもせよ体現しうるのであり、その存在に与り、その存在についての確信を獲得するのである。

私は死んだ。そして私の最後の靈的小管の宝石の鍵をもって蘇った²¹⁾

この確信において信仰は確立され、祭りの意義は成就される²²⁾人は宗教的な死²³⁾をとおして、超越的、神的存在に触れ、その存在の中に自己の存在の意味を見出し、信仰者としてあらたに生まれかわるのである。

信仰、そこに今私の精神は立ち戻ってきて、満足している²⁴⁾

こうした祭りの後の詩人に残された詩人としての仕事は、書くことをとおして、何よりもまず過ぎ去れる祭りを追体験、追認識しつつ、いっそう信仰を深め、祭りにおいて祀られた存在を讃え、歌い、そうして自らの信仰を証すことである。「個人は自分の意志と神の意志とのこの一致を自分の現実生活の心情と行為の仕方とによって証明しなければならない」²⁵⁾のであるから、『イジチュール』の作品としての意味はそこにある。

それはひとつのコントです。それによって私は、それがコントの主題でもあるのですが、無能という古くからの怪物をうちたおしたい。そしてすでに繰り返し考え抜かれた私の大いなる仕事に没入したい。それ(コント)ができあがれば私は癒されるでしょう。同じものは同じもので²⁶⁾

「同じものは同じもので。」この謎めいた言葉は詩人の作品に対する考えを告げている。1867年5月カザリスにあてた手紙では次のように述べている。

君に知らせよう。僕は今や非個人的であって、君が知っているステファヌではもはやなく、かつて僕があったところのものを通して靈的宇宙が自らを映し自らを発展さすべくもつ一能力だ²⁷⁾

また『書物について』では、

非人称化されて、書物は、人が作者として遠ざかる限りにおいて、読者の接近も要求しない。そのようなものなのだ、まさしく、人間的なアクセ

サリーの中で、書物は全くひとりで生起するのだ。作られて、あるのだ。²⁸⁾

それ自体において永遠無限なる自律的営みである精神の姿は、詩人が非個人的であればあるだけ、従って精神のもつ一能力にすぎなくなればなるだけ、ますますあきらかにのおずと作品の中に映し出されてくる。精神が絶対的自律的営みであるが故に、その姿を映す作品も絶対的自律的に全くひとりでおこるようになる。「同じものは同じもので」充足する。パラレリズムの神話である。²⁹⁾これは、詩人自らの明晰な知性によって作品を構成していくというポーの弟子であったところのかつての詩人の態度とはまるで違うものである。かつては、たとえば『半獣神の午後』等に見られるように、詩人は自らの力で美をとらえようとして、自身の無能に苦しんだのではなかったか。

力も萎えし諸腕を、すべり抜けたり、この獲物³⁰⁾

が、今や詩人は反対に非個人的であればあるだけよいことになる。無能は今や絶対的精神の無限の能力の中に止揚されて廃棄され、詩人は、自らの能力を絶対的精神の無限の能力の中にそのひとつとして見出す。信仰が絶望から詩人を救い可能性を開くのである。「信仰者は絶望に対する永遠に確かな解毒剤—すなわち可能性—を所有している。」³¹⁾

まさしく、素晴らしい逆転だといわれよう。かつて1866年3月にはカザリスにあててマラルメはいかなる手紙を書き送っていたことか。

不幸にも詩句をここまで掘りすすめてきて、私は私を絶望的にするふたつの深淵に出あった。ひとつは虚無、私は仏教を知らずしてそこに至った。そして私は今なおあまりにも悲嘆にくれていて、私の詩さえも信じることができず、この圧倒的な思い故にうちすてられた仕事に再びとりかかるともできずにいる。

そうだ、私は知っている。私達は物質の空しい形態でしかない。が実に優れた形態であって、神と私達の魂とを考え出した。友よ、非常に優れているので、私は自身次のような光景でありたいと思う。すなわち、自らは存在していることを意識しながら、存在しないことは承知しているあの夢

に狂ったように身を投じて、魂と、私達の中に初めより積もれる同様に聖なるあらゆる印象を歌い、真実である無を前にしてそれら栄えある虚妄を唱える物質の光景でありたいと。私の叙情的な書物のプランはそのようであり、おそらく書物の題もそのようであろう。「虚妄の栄光」、あるいは、「栄えある虚妄」。私は絶望的に歌うだろう³²⁾

それが同じ年の7月には「虚無を見出した後、私は美を見出した」³³⁾と書き得るようになり、1867年5月には「美しくない—そしてそれはひとつの完全な表現しかもたない—詩しか。」³⁴⁾と書き、また『音楽と文学』においては、「そうだ、文学は存在する。そして望むなら、すべてを除いて、文学のみ。」³⁵⁾と答えるに至る。要するにマラルメは、1866年の春から夏にかけて、すでに見たように、『イジチュール』における祭りをとおして、実際には存在するものから価値=存在を奪い、存在しないことは承知しているあの夢=精神に価値=存在を与えるという逆転をおこなったのである。そうすることによって人間という優れた物質の形態の想像力の産物、従って虚妄である文学、精神が自らの姿をそこに映し出すと考えられた文学を、虚妄という否定から救い、断固としてそれ自体において価値あるものとして肯定せんとするのである。そうでなければ、「すべてを除いて、文学のみ。」という答えはあり得ないはずである。このように、結局のところ、マラルメという一祭司によってひとりとりおこなわれた『イジチュール』における祭りをつらぬいているのは、詩人としての願望である。詩の価値そして詩人の価値および可能性を絶対に確かなものにしたいという願望が、精神についての認識の転換、あらたな靈的宇宙像の構想を産んだのである。一般に祭りが、人生の意味を、あるいは自然の幸を求める人間の願望によるものであると同じように³⁶⁾

だが、自らおのが信仰をうちたてた詩人であるマラルメは、その心の根底においては、すべては構想されたものにすぎぬことを、あくまでも承知している。

私は非常に奇妙な一冬をすごした。一方では夢への美しい帰還によって、他方ではある学についての研究の非常に魅惑的なあの長いプレリュードによって私の思想をうちたてた。しかし事故がおきて、私のかわいそうな病気のマリー、それが思いがけずも私の必然的な抽象的思考とあのきわめて

巧みに組みたてられた私の能力の人工の建築物から私をひきはなし、私を
混乱と完全な無能へと陥れた³⁷⁾

マラルメは「夢」という言葉を捨てない。『イジチュール』においても、「夢
はこのガラス瓶の中で苦悶した。」³⁸⁾と言い、また、『オートビオグラフィ』に
おいても、書物のリズム自身、「あの夢の方程式」³⁹⁾に従って並ぶという。思惟
・精神・霊的宇宙、すべて夢であることをマラルメはあくまでも承知している。
信仰とは夢にすぎぬものを真であると考えたことであることも承知している。
承知していながらマラルメはおのが信仰によって自ら眩惑されることを求めた
のである。闇の宿命的な脅迫に対して、「おのが信仰に眩惑された孤独者」と
して夢を見続けることを。

註

O.C. = MALLARME *Œuvres complètes* : Bibliothèque de la
Pléiade: 1945.

V.M. = Henri MONDOR *Vie de Mallarmé*: Gallimard: 1941.

- 1) エリアーデ著、堀一郎訳『永遠回帰の神話』未来社、p. 12。
- 2) ランガー著、矢野萬里他訳『シンボルの哲学』岩波書店、p. 194。
- 3) ホイジンガ著、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫、p. 46。
- 4) マラルメのドラマの観念については、O.C. pp. 428～429を参照されたい。なお、ドラマについてホイジンガは、「神聖な行事・聖事のこと
は、ギリシャ語では<ドロメノン>という。これは行為されるもの、
所作ということである。表現として演じられるもの、これが<ドラマ>
だが、…」と語っている。（『ホモ・ルーデンス』中公文庫 pp. 44～
45。）
- 5) 「祭祀歌人は、ときには典礼の儀式文の誦者や奉獻の聖劇の演技者にな
るかと思うと、またときには供儀祭司になり、ついには呪術者として姿を
あらわすことさえある。」（『ホモ・ルーデンス』同上、p. 254。）
- 6) これについては、拙稿『広島大学フランス文学研究1』pp. 13-26にお
いてある程度すでに論じたのでここでは論じない。

7) O.C. p. 438.

8) O.C. p. 434, なおヘーゲルの次の言葉を参照されたい。

「精神は静止したものではなくて、むしろ絶対的に不安なもの、純粹な活動であり、あらゆる固定した悟性規定の否定または観念性である。

(『精神哲学 上』岩波文庫, 船山信一訳, pp. 11 ~ 12)

9) O.C., p. 436.

10) *Ibid.*, p. 434.

11) *Ibid.*, p. 442.

12) *Ibid.*, p. 437.

13) *Ibid.*, p. 438.

14) *Ibid.*, p. 438.

15) *Ibid.*, p. 441.

16) V.M., p. 237.

17) ランガー著『シンボルの哲学』岩波書店, p. 207。

18) 同上。

19) O.C., p. 439.

20) ホイジンガ著『ホモ・ルーデンス』中公文庫, p. 67。

21) V.M., p. 212.

22) ヘーゲルは信仰について次のように言っている。

「絶対的精神の主観的意識は本質的に自己内において過程である。そしてこの過程の直接的実体的統一は信仰である。ところで信仰は精神〔聖霊〕のあかしのなかで客観的真理に関する確実性として存在している。信仰はこの直接的統一であると同時に、統一をあゝの区別された諸契機の相互関係として含んでいる。こうして信仰は信心・含蓄的なまたは開示的な祭儀において、精神開放に対する対立を廃棄し、この媒介によってあゝの最初の確実性を確証し、あゝの最初の確実性の具体的規定、すなわち精神の和解、確実性を獲得するという過程に移行している。」(『精神哲学 下』岩波文庫 p. 283)。

だが、ニーチェはより直截的に、そしておそらくいささか皮肉に次のようにいう。「信仰とは何か? いかにしてそれは生ずるのか? あらゆる信仰は真なりと思ひこむことである」(『権力への意志 上』理想

社, 原佑訳, p. 31)。

23) 例えばエリアーデの次のことばを比較参照されたい。

「伝承文化人は、自身をリアルなものとして、すなわち〈真実のわれ〉と見るのは、ただ、そして正しく彼が彼であることを止める限りにおいてである。」(『永遠回帰の神話』未来社, p. 49)。

24) V. M., p. 293.

25) ヘーゲル著, 武市健人訳, 『哲学入門』岩波文庫, p. 122。

26) V. M., p. 286.

27) V. M., p. 237.

28) O. C., p. 372.

29) cf. L'homme chargé de voir divinement, en raison que le lien, à volonté, limpide, n'a d'expression qu'au parallélisme, devant son regard, de feuillets. (O. C., p. 378) .

30) O. C., p. 52, また1864年1月カザリスにあてた手紙では, 「行けば行くほど, 私の偉大なる師エドガー・ポーが私に遺したあの厳しい思想に私はますます忠実でありましょう。」(V. M., p. 104) といっている。

31) キルケゴール著, 斎藤信治訳, 『死に至る病』岩波文庫, p. 62。

32) V. M., p. 193.

33) V. M., p. 211.

34) V. M., p. 238.

35) O. C., p. 646.

36) 例えば, ランガー著『シンボルの哲学』岩波書店, pp. 194 - 196を参照されたい。

37) V. M., p. 294

38) O. C., p. 439

39) O. C., p. 663

40) 「思考されうるものは虚構たらざるを得ないことは確実である」(ニーチェ著『権力への意志 下』理想社, p. 64)。

41) O. C., p. 67.